One step ahead 臨地実習！ ～新たな臨地実習がかたちづくる臨床検査の未来～

◎關谷 暁子 1)
学校法人北陸大学 1)

2022 年度入学生から適応となる、改正された臨床検査技師学校養成校指定規則では、臨地実習を受け入れる施設は「臨地実習指導者講習」（以下「講習会」）を修了した「臨地実習指導者」を 1 名以上配置することが必須となりました。講習会プログラムは、動画視聴による学習（510 分）とワークショップ（460 分）から構成され、すべてオンラインで実施されます。このうちワークショップでは、臨地実習指導者が「①目標・評価・方法の整合性のある実習プログラムの立案と評価ができること」および「②臨地実習における対象者の権利保障や合理的配慮について理解し、多様な学生に対する適切な対応を学ぶこと」を目的とし、グループワークを通して学びます。2024 年 3 月までに 1600 名あまりの臨地実習指導者が誕生しています。

さて、「新たな臨地実習」は、検査部門と臨床検査技師に何をもたらすのでしょうか。

指導者となった技師は、意識と行動にどのような変化が起きたのでしょうか。臨地実習指導者の登場は、検査室においてどのような変革となるのでしょうか。そして、そこにはどのような困惑や葛藤があるのでしょうか。

「新たな臨地実習かたちづくる臨床検査の未来」について、会場の皆さんとともに検査室視点で考えてみたいと思います。

（１）直接指導する立場から：藤田望（徳島大学病院）

指導者講習会を受講後、スタッフには指導の対象は新人技師ではなく学生であり、合理的配慮を理解したうえで対応が必要であることを説明し、新ガイドラインに沿った形で指導内容の見直しを行いました。実習内容としては安全に配慮しながら、現場での一日の流れを体験してもらっており、卒後でも質問ができるような関係性を目指し、積極的にコミュニケーションをとるように心がけました。指導に室員全員で関わることで、若手技師にも自分自身の手技の確認をするような変化がみられています。興味も進路も様々な学生のニーズに沿うことは難しいですが、卒前教育から卒後教育へうまくバトンをつなぐために、学生の「やる気スイッチ」を探す日々です。

（２）管理者の立場から：桑原喜久男（新潟県済生会三条病院）

当院は 20 代～30 代が約 7 割を占める臨床検査室です。若いスタッフが中心となり学生を指導しています。臨地実習指導者ができる以前、各部署が必要と思われる内容の座学、実習を行っておりましたが、期間内にやらなければならない事が明確になっておらず、学生の為になったのか？との不安が残っておりました。ガイドラインにやらなければならない事が明記された事で、実習の順番、教える内容、タイミングを指導するスタッフが考えるようになり、スタッフの教育につながっています。スタッフの社会人としてのふるまい、幅広い年代の多職種スタッフと一緒に仕事する様子を見ていただくことが、学生の社会に出てからの座標軸になってくれると考えます。

（３）指導者を育成する立場から：宮原祥子（伊那中央病院）

合理的配慮など教育的視点を講習会で初めて学ぶ方も多かったのではないでしょうか。現場で担当する技師と学生の間にはジェネレーションギャップも存在し、私たちは実習の場で様々な課題に直面します。臨地実習指導者の育成にあたり、実習施設ごとの学生教育に関する温度差もあります。臨地実習指導者が必要であることを真摯に受け止め、新しいカリキュラムになる前にと入念に準備をする施設もあれば、指導者を作らない施設も存在します。臨地実習は今新しいスタートラインについたばかりであり、今後は学生教育に関する知識を増やす研修や、養成校と実習施設の密な連絡体制の構築等が求められます。

学生教育はそのまま職場の新人教育にもつながる知恵です。新しい仲間へ、私たちが臨床検査技師のあるべき姿を伝える力をつけ、未来を作っていきましょう。